

十二月十一日

九時半小田急線喜多見駅前。朝の陽光の中で一人広場に面したコーヒーショップの外のテーブルに居る。紙の照明でチョツとしたアイデアを思い付いたところ。小さいモノのデザインの場合思いつくのは楽なのだが、それを一つに絞り上げてゆくのがむずかしい。

午後、研究室で高橋さんファミリーと久し振りにお目にかかる。進行性の難病の渦中にあるご主人を中心に奥さんと子供達。希望の家なんて言う幼いセンチメンタリズムは一切捨てて、親子が現実の冷たさと対面し、自立して生活を営んでゆく為の家を考えなければ。天井高2・8Mの上海の箱が使えれば下階の女子寮部分はOKなのだけだ。上階は木造の光に溢れた空間が良いだろう。平塚の柳本君も関心を寄せてくれるかも知れぬ。

十七時渋谷東急INロビーで松林宗恵、馬場昭道両氏と会う。フィンランドに日本の寺院スタイルのパビリオンを建設する件。松林氏からは長い映画監督としてのキャリアから適確なアドバイスをいただいた。天松の天婦羅をごちそうになった。お二人に何度かお目にかかっているうちに段々私の方もフィンランドのプロジェクトのイメージがハッキリしてきた。阿弥陀堂+鐘楼に十数名程宿泊可能なスペースに事務、収蔵庫。松林さんの意見を取り入れて、夕焼けの中で山のお寺の鐘がなる、風景でやってみよう。

二〇時過、昭道さんと池尻の佐藤健の会へ。六車氏、イチローからのメッセージを皆に伝え、健さん所蔵のイチローのスパイク

を有難く拝謁する。二十三時過ぎ、名残り惜しいが去る。懐かしい顔が全く変わりもなく顔を揃えていた。なつかしさに負けて度々会おうなんて言い出したら、もうおしまいです。年に一度が良い。

十二月十二日 日曜日

十二時過、中央高速を走り、今、樹海を走っている。十三時上九一色村富士嶺観音堂。この前の強風豪雨も大丈夫だった様でホツとする。ここは風速七、八十メートルは吹きそうだから。雨もりも止まった。屋根の笠木の未接合部分から強風にあおられての水であった。自然は恐い。冬富士を間近に、光に満ちた観音堂になってきた。

ステンレス製の墓の群の端に座り、冬の風に吹かれて、しばし観音堂と富士山を眺める。まだ誰も認めてくれてはいないが、この観音堂は革新的な建築だと思う。富士山を間近にしたこの場所にはこの形しか無かった。水道も無く、水を得るのは天水が頼りだから、屋根は雨水を溜め込む装置にならざるを得ない。東京都西早稲田観音寺で試みた屋根の考えが踏襲されている。小さいけれど烈々と富士山に対面しているのだ。墓地は死者の累々たる記憶によって生み出される場所だが、ここではその記憶の集積が、集まる人の、時にして弱々しい生命力に力を注入するようなものでありたいと考えた。ここ迄来る人は自身の生命の力に何等かの疑いを持つのが多いのだから。観音堂はエネルギーそのものであるが如き生命の有様を形にしようと考えた由縁である。

しかも、ここはオウム真理教事件のサティアン遺跡群の中心地だ。密教的造形は極力排除しなければならない。まぎらわしいスキャンダルの通俗に落ち込む事だつて無いわけではない。用心し

て材料、形を非密教的な世界に持つていかねばならぬ。それで、こんな風な飛ばない飛行機みたいな物体にした。

世界には異人も呼ぶべき人が確かに居る。観音堂のクライアントもその一人である。この建築はその人物の異人振りをそのまま形にしたとも言える。その事は何回かに分けて表紙ギャラリーで書いてみたい。

只今、十五時そろそろ東京に戻ろうか。作った建築につかの間の自信が持てただけでも良い一日であった。小さな時から知っていたマサ君が観音堂に来ていて、すっかり口もきけるようになっていたので驚いた。十六時過中央高速八王子料金所。富士嶺観音堂から帰りは一時間か、近い。しかし、距離も時間も金で買っている。

先程、観音堂で墓地及び建築の夜景写真を撮りいただいた。ステンドレスの表面に光の反射光を宿し建築も天地に裂けながら光っている。その光の中に、ひととき大きな丸い光が写っている。それは観音光だと写真をくれた人は説明した。クライアントは観音玉光だと言う。私はその類を信じない。しかし変な光が写っていることは認めざるを得ない。現実世界にも科学的合理だけでは説明できぬ事がどうやらある事実は受け入れても良いと考え始めている。人間には明らかに個別な尊厳が在る。ようするに個性がある。その事実を認めると異人、異能の存在は論理的には認めざるを得ない。さすれば異常現象の出現もなくてはならないであろう事へと自然に思考は拡張せざるを得ないだろう。